現実についての「考えを書く」こと

小野田　貴　夫

0．はじめに

ある種の現実について自分の考えを書くように求められた時、どのような表現様式が使われるのか、実際の調査を通じて考察していく。調査方法としては、ある特定の現実を提示して、それについて自分の考えを書くように教示を与え、そこで書かれた表現の構成要素(話題及び話題の扱い方)や構成(展開)について分類する。それによって、「自分の考えを書く」ように指示されたり、促されたりする時の認識や表現の形式を理解していく。あらかじめ結論を言っておくと、次のような標準的な表現様式が確認できる。

中心的な話題の選択：マイナスの要素を含んだ問題
話題の展開：次のA→B→Cの順番
　A：事実の確認
　B：その事実への批判的な指摘(＝対立する事実の提示または対立的な解釈)
　　[←逆説的な接続詞等の使用]
　C：行動指針の提示(＝Bが理由となりCの結論へ)
　　[←「〜べきである」「〜がいいと思う」等の使用]

いわゆるレポートの書き方やプレゼンテーション、または議論の方法として、どのように書くべきか、または語るべきか、そうした方法やトレーニングに関する著書は、非常にたくさんある。論理的な思考方法を紹介しながら、それを支えにして、過不足なくテーマや結論、その理由等を論述する仕方は、もちろんのこと、より効果的に提示したり、納得させるための方法まで、取り上げられている。学生やビジネスマンを対象に、実際の需要を反映しているのだろう。国家戦略としても経済界の動向に応じた教育改革が推進されていくなかで、いわゆる論理的な思考を含むクリティカルシンキングの育成が重要視されている。

しかし、ここでは、自分の考えや意見をどう書くべきか、または理想的、効果的な書き方とは何か、と言ったことを扱うのではない。もっと素朴に「あなたの考えを書きなさい」と求められた時に、実際にどのような応答するのか、その実践的な表現の仕方、そのバリエーションについて理解していく。

天気予報や帰りの時間を想定しながら登校する子どもに傘を持つように指示したり、家計と相談しながら週末はどうすれば有意義に過ごせるか計画したり等、好みや情緒が混じりながら何かを論理的に思考し行動することは、日常的になされているが、いわゆるレポートや論文となると、論理的であることの要求がずっと高くなり日常とは違う思考様式・表現様式が求められてくる。たとえば、いわゆる論述の手順として、(科学的な)論文に好まれるIMRAD型や、高校や大学でのレポートや小論文で最近よく推奨されている「テーマ→結論→理由(→補足・まとめ)」型(そしてそれらの亜種)が、教育の場で自覚的に指導されるのも、

そうした表現様式が特殊だからであろう。論理的な「曖昧さ-厳密さ」を測る軸を想定すると、一方の極に実践的・日常的な論理的思考・表現様式があり、もう一方の極に科学的な論理的思考・表現様式があり、その間に中間タイプが存在する。

ここで、調査対象として想定している表現は、実践的・日常的な論理的表現様式よりは、正確さを求められ、いわゆる論文のような論理的表現様式よりは、曖昧さを許容される、そうした中間的な表現である。この中間型への関心は、一つには、何かを説明する強度を高めていった時に、自然発生的にはどのような表現様式をとるものなのか、その標準的なタイプを確認しておきたいことにある。逆にいえば、何かを説明するための表現様式のヴァリエーションを標準型からの偏差として理解してみたい。この関心のみをここでは扱うが、展望としては、いわゆる文学作品、特に物語に求められる表現様式との違いと共通性を確認してみたい。ある程度まとまりのある表現について各ジャンル間の連続性と差異を体系的に説明するための基礎的な調査となる。

1．調査方法・内容

対象者：短大生28名(すべて女性)

実施方法：「いまから作文による調査を行います。作文の課題は 3 つあり、それぞれ10分で完成させてください。課題の内容は、それぞれの用紙に書いてあります。」と告げ、最初の課題を配布。同時に開始し、10分経ったところで回収し、次の課題を配布する。

課題内容は、次の 3 つである。

1　あなたが自宅を出てから教室に入るまでのことを書いてください。(10分)

2　「男の子」と「絵」と「海」を素材にして、独自の物語を作り書いてください。(10分)

3　現代的な生活とエネルギーの今後のあり方についてあなたの考えを書いてください。(10分)

ここでは、課題 3 で書かれた「考えを書く」時の表現を対象とする。10分で書くという制約のなかで、ある特定の現実的なことに関して考えを述べるということが、どのように理解され、表現されるのか、実際の表現から探っていく。

課題 3 の調査データは、28名分の28ケースを本論末に「本文一覧」としてすべて載せた。各ケースには、t-1 から t-28まで通し番号を打ってある。

ここでは、課題 1 と課題 2 に関しては考察の対象としない。今後の研究で、それぞれの課題間の表現様式の相対的な違いや特徴について扱っていく予定である。課題 2 に関しては、試論的な考察をすでに加えている(小野田 2012[i])。本論に入るまえに課題 1 、課題 2 、課題 3 、それぞれの課題で想定した表現力について解説しておく。

課題 1 からは、経験的な事実を(再)構成する表現、課題2からは、事物の時間的な展開に重きをおいた物語表現、またそれに自ずと付随する文学的な表現、課題 3 からは、ある事実に対する認識とそれを補うための論理的な表現が、導かれると想定した。 3 つの課題のそれぞれに求められる表現力の特徴は、次のように要約できる

1．「自宅から教室まで」課題：日常的な経験的事実の表現。日常的にありふれた事実に依拠しながら、選択する場面によって、まったく違うイメージとなるため、文学的な表現力の潜在的な可能性を確認することもでき、またある意味で私的な経験でもあるため、自己

開示に対する抵抗の度合いも反映される。

2.「男の子と絵と海」課題：文字通りの物語の創作能力。これは、大きく二つの表現力から成り立つことが確認できている(小野田 2012)。ひとつは、時間的な展開にそって、人(や動物、物)の行動や生成過程を一つの(または同時に複数の)テーマに統合する表現力。これは、具体的には物語のはじまりとおわりや、登場人物に課せられた課題―達成(障害―克服)の組み合わせとなって表現されてくる。もうひとつは、一つ一つの言葉の選び方や組み合わせによってイメージを作り出す力である。修辞的な技法だけでなく、視点の置き方や移動のさせ方等を含む。

3.「現代的な生活」課題：現実的なことがらに対する判断や意見について、そこにいたる理由や原因とを論理的に組み合わせて提示する表現力。いわゆるレポートや論文等の表現に通じる論理的な構成力が試される。

2. 結果と考察

2-1. 文字数について

漢字、カナ、句読点の区別なく文字数をカウントした時の平均値は、235.5文字、標準偏差は、56.7文字である。 一番長いケースは、340文字、 一番短いケースは、126文字である。平均値の文字数に近い文章としては、次のものが該当する。

(ケース t-7)

現在、日本では原発が問題になっている。3月11日に発生した東日本大震災。これにより、福島の原発が爆発し、チェルノブイリ以来、最悪の原発事故が発生してしまった。放射線など、たくさんの問題が山積するにもかかわらず、政府は具体的な案を出さず、日々時間が過ぎていっている。そんな中、先日、東京で脱・原発と銘打った大規模なデモが起こり参加者は4万人を超えた。あのような悲劇を再びくりかえさないために、我々日本、いや、世界が原発から離れるべきだと思う。(225文字)(本論末の「本文一覧」を参照。以下同様。)

2-2. 話題の展開について

改めて指示を確認しておくと、「現代的な生活とエネルギーの今後のあり方についてあなたの考えを書いてください」となっており、「現代的な生活とエネルギーの今後のあり方」を話題にするように指示している。話題にすべき部分の表現には、曖昧な部分があり、「現代的な生活」と「エネルギーの今後のあり方」の両方を話題にするのか、「現代的な生活とエネルギー」の両方に関する「今後のあり方」について話題にするのか、特定できない。

α：「現代的な生活」と「エネルギーの今後のあり方」の両方を話題にする

β：「現代的な生活とエネルギー」の両方の「今後のあり方」について話題にする

ただ、どちらにしても「今後のあり方」については、必ず話題にしなくてはならない。この言葉は、対象者には「今後のあるべき姿」と認識された可能性がある。実際に、「〜すべき」「〜しなければならない」「〜するのがいい」等といったある種の義務を伴った行動の指針が書いてある文章が、約9割(25/28ケース)である。先に載せた標準的な文字数のケースも、最後に「あのような悲劇を再びくりかえさないために、我々日本、いや、世界が原発から離

れるべきだと思う。」とある。

ただし、今回対象としている集団と同じ属性の別集団を対象(20名)に、「現代的な生活とエネルギーの今後のあり方」の部分を、「絵本」や「メール」に変えて行った調査でも、半数を超えるケースで、行動指針が記されていた(指示内容は、「絵本についてあなたの考えを書いてください。」と「メールについてあなたの考えを書いてください」)。今回、対象としている調査では、「今後のあり方」という表現が、直接的に行動的な指針を書くように促した可能性は確かに高いのだろう。だが、「絵本について」や「メールについて」というそれ自体に何かしらの将来的な希望や義務を連想させるような表現でなくても、半数を超えるケースにおいて自動的に行動的な指針が書かれるということは、「〜についてあなたの考えを書いてください」という指示のほうにかなり高い影響力をもって行動的な指針の記述を促す要因があると考えられる[ii]。

再び「現代的な生活とエネルギーの今後のあり方」に関する課題に議論を戻すが、では、そこに書かれる行動指針は、文章の展開のなかでどのように示されるのか。基本的な事項と順番としては、先に「事実」が示され、最後に「行動指針」が示される。これは、課題文にある「現代的な生活とエネルギーの今後のあり方」の各部分とその順番を基本的な枠組みとして次のように反映させているかのようである。

「現代的な生活(とエネルギーの)」[＝事実]⇒「(エネルギーの)今後のあり方」[＝行動指針]

この組み合わせは、全体の７割半にあたる21ケースである。

さらにもう３ケースは、変則的なかたちをしている。２ケースは、いわば拡張型で、一つは、「事実→行動指針→行動指針に対立する予想」(t-20)、もう一つは、「事実→行動指針→事実→行動指針」という反復型である。残りの１ケースは、「事実１→事実２→事実２についての行動指針」という形になっている。事実１についての行動指針は示されていない。この３ケースも「事実→行動指針」型に含めると、24ケースとなり全体の８割となる。

もう少し丁寧に見ると、行動指針に先立つ事実の指摘の部分は、二つの部分からできているケースが多い。まずある事実を取り上げる部分と、続いてその事実に対立する事実を指摘する、または対立する解釈を述べる部分である。そして、最後に行動指針を示すという展開となっている。従って次のようなA→B→Cの展開となる。

A [事実] →B [対立する事実/解釈] →C [行動指針]

これが全ケースの約６割半(17/28ケース)にあたる。

やはりここにも、A→B→Cのタイプとは違う変則的なケースが、３つある。一つは、先の「事実→行動指針」の拡張型と同じケースで、A→B→C→「指針に対立する予想」(t-20)。もう二つは、曖昧なタイプで、そのうちの一つは、A事実→[B１対立する事実→B２さらに対立する事実→B３さらに対立する事実]→C行動指針(t-23)、もう一つは、A１事実→B１対立する解釈→A２事実→B２対立する解釈→[C１行動指針→C２行動指針](t-24))。

この組み合わせの17ケースのうち、13ケースにおいては、A→B→C間の話題の展開に論

理的な整合性が見られる。(A)事実が、(B)それに対立する事実や解釈によって反省的に捉えなおされ、(C)これからすべき行動指針が導かれる。別の言い方をすると、(A)客観的な事実が確認され、(B)それが対立する客観的な事実や主観的な解釈によって批判され、それが根拠(理由や原因)となることで結果として(C)行動指針が示される。

A 事実 →B 対立する事実/解釈(理由) →C 行動指針(結論)

このA→B→Cの流れを、次のケースで表示してみる。A：事実を一重の傍線、C：行動指針(結論)に二重の傍線をひき、A-Cの中間にあたるB：対立する事実/解釈(理由)には傍線を引かずそのままにした。改行は、オリジナルの文章にはないが、展開の仕方を分かりやすくするために一文ずつ後から加えた。

(ケース t-1)
現在の生活に電気は欠かせない。
電車やパソコン、照明など、挙げたらきりがない。
その電気を発電する中で3割を占めているのが原子力発電である。
今回の震災で原子力発電の危険性が浮き彫りになった。
それを受け、デモを行う人たちもいる。
作った事に対して怒りをぶつける人もいる。
しかし、原子力発電の恩恵を受けているのは私たちである。
それによって生活が豊かになったにも関わらず、危険だと知るや否や、今までのことを忘れ憤る。
私はこの行動に違和感を覚えた。
原子力発電の危険性を知った我々なら、今後の対応について考えていけるだろう。
今はただ怒るよりも、新たなエネルギーを見つけ、それに変えていけるように、前を向くべきである。
自分たちでもできる太陽光発電の設置や節電をすすめるべきだ。

このことは、ある事実についての「考えを述べる」ときに、その話題の展開と論理の展開にある種の形式ややり方という意味での様式(モード)があることを示している。ある事実についての考えを書く時には、まずある事実を取り上げ、それを批判的に問題視し、その問題を克服するための指針を示すべし、という話題の展開(順序)と論理的な展開の文章表現上の様式(モード)があるかのようである。この様式を私たちは、説明ないし説明文と呼んでいることになる。

たとえば、「現代的な生活」と「エネルギーの今後のあり方」の二つのことを話題にすべきだと認識した人も、まったく関連性のない二つの話題として別々に書くことも可能なはずだが、作文上の様式(作法)が両者を論理的な結びつきとして連想させている。または、「現代的な生活とエネルギー」の両方の「今後のあり方」について話題にすべきだと認識した人も、「今後のあり方」を語るためには、「現代的な生活とエネルギー」の実際についてその根拠となるようにまず先に語るべしと、作文のための様式が促していると考えられる。

少し脇道にそれるが、「現代的な生活」と「エネルギー」のそれぞれ(の「今後のあり方」)について

別々の話題として書くことも可能なはずである。が、「現代的な生活」という言葉は、「エネルギー」という言葉と意味的に関連づけられて、「エネルギーを大量消費する現代的な生活」と認識されることがほとんどである(1ケースのみ両者を別々の二つの話題としている(t-25))。

繰り返しになるが、「今後のあり方」を語るためには、「現代的な生活」と「エネルギー」の実際が、「今後のあり方」に対して論理的に結びつくように(「今後のあり方」の理由または原因となるように)連想され(誘導され)てしまうのである。

補足しておくが、先に触れた別集団に対して行った「絵本について」と「メールについて」の課題でも、「A：事実→B：対立する事実/解釈(理由)→C：行動指針(結論)」の展開上の構成をもったケースが、半数弱確認できる。「絵本」については、全20ケースのうち8ケース、「メール」については、9ケースである。このA→B→Cの様式が、たしかに「現代的な生活とエネルギーの今後のあり方について」という表現の内容と順番によって、促された可能性は、「絵本」や「メール」といった単体の言葉(概念)についての考えを書く時よりも高いと言える。だが、「絵本」や「メール」という単語を示すだけの課題でも、A→B→Cの型が、半数近く出現するということは、やはり「〜についてあなたの考えを書いてください」という指示自体に、その様式を誘導する効果があると想定できる。

2-3. 話題の選択と問題にすること

全体の5割弱(13/28ケース)が、福島の原発事故の影響を中心的な話題にしている。この調査は、3.11の地震から約半年後に実施しており、作文の指示にある「エネルギー」という言葉、そして「今後のあり方」という未来への志向性が、原発を話題として扱うように連想させているようである。

「原発」という言葉を使っていなくても、震災後の電気エネルギーの不足や環境汚染を中心的な話題にしているもの、つまり原発事故も含めた震災の影響を中心的な話題としているものが5つあり、先の直接原発事故について触れているものを加えると、18ケースで、全体の6割を超える。

では、残りの10ケースは何を中心的な話題としているのか。震災や原発事故への言及なしに、エネルギーへの過度な依存を扱ったものが、3つ。やはり震災や原発事故への言及なしに、節電・節約やエネルギーの不足への対処を扱ったものが、3つ。電子機器と電気エネルギーに関するものが、2つ。食べ物によるエネルギー摂取を中心としているものを2つ。

これらの話題は、それぞれの文章のなかでどのように扱われるのか。話題の細かな違いがあるにも関わらず、28ケースすべてにおいて、マイナスの要素を含んだ「問題」として扱われている。

マイナスの要素とは、具体的には欠如、不足、不完全、危険、不安、心配等々といったものである。こうした負の要素を含んだ問題として話題を選ぶことは、先に示した文章の展開と不可分の関係にある。つまり、標準的な展開としては、次のA→B→Cのような3段階になっている。

A：先に、客観的な事実を話題として取り上げ、
B：続いて、その話題として取り上げられた事実のなかに、欠如、不足、不完全、危険、不

安、心配等の負の問題があることを批判的に指摘して(解釈して)、
Ｃ：最後にむけて、あるべき行動指針を提示する。

先にあげた二つの例文もそうであるし、さらに次のものも載せておく。

（ケース t-3）
エネルギーについて私が考えたのは食から得られるエネルギーについてです。
昔は朝ごはんをしっかり食べてから学校、会社に行く人が多かったと聞きます。
しかし 現代では朝ごはんを食べいる人は少なくなっているという現状があります。
朝ごはんを食べる食べないでは、その日の自分体力、気持ちに大きく関わってくるのです。
エネルギーを作るもの(素材)がなければエネルギーは作れません。
朝ごはんだけではなく昼も夜もエネルギーに関わってきます。
今後私たちはもっとエネルギーを使うためにも食生活を見直すべきです。
「エネルギー」は今後、人々の中で今よりさらに大切になる存在であるべきなのです。

さらにこのケースでもそうであるようにＡからＢに移っていくときには、「しかし、」「～(だ)が、」といった逆説の接続詞・接続助詞や逆説的な副詞を使うことで、現実的に存在しまたは意識的にも無意識的にも受け入れられている事実への対立、抵抗、否定を明示的にしている。諸事実を述べた後のＢの部分で、はっきりと逆説の接続詞、逆説的な副詞の用法を含む文をつなげているものは、13/28ケースある。典型的なケースを２つあげておく。

（ケース t-5）
ＩＴ化がすすみ、ＰＣ，ケータイ等、電力が必要なものが多くなってきた。しかし 問題はその、エネルギーをどう確保していくかだ。

（ケース t-2）
反対派は原発を「今すぐにでも無くせ」と訴えている が 、無くしたところで、原発で作っていた電気や物はどうやって作り出すのか・・・

2-3-1. 物語の主人公もマイナスの要素を持つ

マイナスの要素を含ませることは、同じ時に行った物語の創作課題と類似した傾向がある。つまり、物語が進展していくための理由・原因として、また物語の進展に緊張感とその開放・解決といった起伏を与えるように、主人公にマイナスの要素や性質をあらかじめ負わせておくことが多いことと並行している。さらに物語の創作では、主人公が最後にマイナスの要素や性質を克服したり改善したりすることで、プラスに転じて終わらせることが多い。そしてある現実について「考えを書く」課題では、最後に、現実の問題に対抗したり克服したりしていくためのある種の理想や当為を提示することが多い。これも一つの希望の示し方だと考えられるし、そのような意味でやはり文章の意味の流れや印象をプラスに転じる表現だと言える。

「考えを書く」課題と物語課題の標準的な展開をさらに重ねて考察してみる。

まずは「考えを書く」課題の標準的な展開を物語の課題のように人の振る舞いとして解説してみると、

A：ある人(人々)が問題を抱えている

B：その問題と向き合わざるを得ないような事態に出会う

C：なすべきこと(解決策)を見出す

となる。

物語課題の標準的な展開を、「考えを書く」課題の展開に合わせて解説してみると、

A'：ある人が問題を抱えている

B'：その問題と向き合わざるを得ないような事態に出会う(ある所に行く)、

C'：なすべきことなす

D'：問題が解決する

となる。

比較すると、Cの段階で違いが生じ、物語課題は、Dが追加される。物語課題は、現実ではなく幻想の中に閉じているために、問題を解決することで一つの完結した表現の単位を作っている。それに対し「考えを書く」課題は、問題が現実の物事であるために実際に解決することはできない。物語課題で言うと、C'のようになすべきことをなすことができない。つまり「考えを書く」課題の表現が実際になしうることは、問題の指摘だけに留まってしまうのだが、そこで終わってしまうと、指摘された問題の緊張感だけが持続され、一つの表現として閉じた安定感を維持できないかのようである。そこで、未来に問題が解決された終わりを想定し、そこに到達できるように「なすべき」行動の指針を見出し、提示することで、仮想的に問題を解決し、終わりにしてしまう、つまりは表現の単位としての安定感を作りだしている。

(ケース t-19)

現代的な生活とは、アナログでない生活のことを言うのだと思う。

例えば書籍の電子化は現代的だと思う。

ただ、現代的な生活には電気がどうしても必要になってくる。

原発問題が騒がれているが、電気が必要だからこそ問題になっている。

この文章では、事実が示され、そこに問題があることが指摘されているが、そこで終わっているため、たとえば書くための時間が足りずに途中で切り上げてしまったような印象が残る。他と違い「なすべき」行動の指針が書かれていないことが一番の理由であろう。上の文章は、実際には、「・・・必要だからこそ問題になっている。」の後に、「自然エネルギーの推進」とあって、句点で閉じられていない言葉で終わっていることからも、文章を終わらせることができなかったことが暗示されている。

改めて標準的な話題選択及び話題の展開についてまとめてみる。

中心的な話題の選択：マイナスの要素を含んだ問題(福島の原発事故の影響等)

話題の展開：A→B→C
A：事実の確認
B：その事実への批判的な指摘（＝対立する事実の提示または対立的な解釈）
[←逆説的な接続詞等の使用]
Bが理由となりCの結論へ
C：行動指針の提示
[←「～べきである」「～がいいと思う」等の使用]

2-4. 標準的な展開を持たないケースについて

A→B→Cといった標準的な展開をもった17ケースのうち、13ケースについては論理的な整合性・一貫性が確認できる。一方、A→B→Cの標準的な展開をもたないものが、11ケースある。そのなかで論理的な整合性・一貫性が確認できるものは、3ケースしかない。このことから、A（事実）→B（批判）→C（指針）といった展開の形式と内容の論理的な整合性とは、親和性があると考えられる。A（事実）→B（批判）→C（指針）の展開が論理的な整合性を導きやすいのか、その逆なのか、または相補的なのか、ここでは、問えない。が、物語（の創作課題）に標準的な様式が、確認できたように、「～についての考えを書く」といういわば説明文にも、説明文に必要な論理性を満たす標準的な形式が想定できるとは言える。

2-4-1. 事実を特定できないケース

標準的な展開をもたない11ケースの中には、そもそも課題の条件を満たしていないものが、2ケース（t-18, t-19）ある。

この2つに特徴的な部分は、「現代の生活」や「エネルギー」に関する事実は指摘しているが、「今後のあり方」については書いていないところである。この二つは、「A事実→B対立する事実/解釈」のところで、事実をうまく特定できない、選択できていない。つまり批判すべき事実を提示するところで、ある話題から別の話題に連想的にずれていって、批判すべき事実の輪郭が曖昧になってしまう。つまるところ、何を批判していいかうまく指摘できずに、従って行動指針も示すことができなくなってしまうようだ。

一つのケース（t-18）は、次のものである（改行は、本文には無い）。

（ケース t-18）
現代は、ＴＶ、ＰＣ、ランプなど、電気のエネルギーの消費が激しい。
人間は、それにたよってしまい、運動を怠ってしまうし、いろいろな食べ物が手に入るようになったから、体のエネルギーは、十分に消費できず、そのせいなのか、肥満が満えている。
それが気になった人間は、ＴＶの通販を見て、外にも出ずに、ランニングマシンなどを買う。
それを運送するのは、もちろんトラックや飛行機など、機械である。
その機械はガソリンというエネルギーを使う。
ガソリンの元は石油だとどこかできいたことがある。
人間は、自分で石油というエネルギー源を使い、使ったことを悩む。

要約すると、「電気エネルギーへの依存が、人を肥満にしていて、それを解決するために、石油を使う」という事実を指摘した後で、「人間は、自分で石油というエネルギー源を使い、使ったことを悩む」としているが、どうしてどのように悩むのか、書いていない。おそらく「石油をエネルギー源とする現在の便利な生活が、人を怠惰にし、肥満(成人病)にしているのだが、その解決にさらにまた石油エネルギーに頼ろうとする」という事例をあげたかったのだろうが、そのことが徹底した石油依存の生活様式になっているという概念的な把握に達していないために、前半で話題にした「電気エネルギー」と後半で話題にした「石油」のことが繋がらなくなってしまい、結局なにを批判すべきなのか、捉えられなくなってしまっている。

もう一つケース(先にあげたケース t-19だが)も「A事実→B対立する事実/解釈」の部分で事実の特定に失敗して、「今後の有り方」を述べるところまで達することができずに終わってしまっているケースである。

(ケース t-19)
現代的な生活とは、アナログでない生活のことを言うのだと思う。
例えば書籍の電子化は現代的だと思う。
ただ、現代的な生活には電気がどうしても必要になってくる。
原発問題が騒がれているが、電気が必要だからこそ問題になっている。
自然エネルギーの推進(中断)

要約すると、「書籍の電子化に見られるように現代的な生活は隅々までデジタル化されている」ことを話題にした後に、それに対して「原発事故の後に十分な電気が供給されなければ現代的な生活は維持できない」ことを対立的な事実として提示したかったのだろう(しかし、「書籍の電子化に象徴されるデジタル化された生活」という非常に先進的であるが、まだ普及し始めたばかりの局所的な話題と、生活全体を脅かすような原発事故による電力不足という文字通り全体的な話題とが、アンバランスでかみ合わなくなってしまっている。すると、「今後の有り方」として、「書籍の電子化」を止めればいいということなのかもしれない。が、そもそもあまり普及していないので止めたところで節電の効果が期待できそうにない案を出すのか、それとも原発の問題に重点を置きながら、「書籍の電子化」のことは脇において、たとえば代替エネルギーの普及を訴えておしまいにするのか、どちらにしても治まりの悪い「今後のあり方」しか出せそうにない。結局、「今後のあり方」を語ることができないままに終わってしまっている)。「書籍の電子化に見られるように現代的な生活は隅々までデジタル化されている」ことを話題として展開させるには、まさに本文にある言葉を使えば「アナログ」的な生活を話題として対置させるのが、よいのだろう。しかし、そうするともう一つの課題である「エネルギー」への言及ができなくなり、飛びついたのがエネルギーからの連想で「電気の必要性」というかみ合わない話題の対置となってしまった、と考えられる。

この二つ(t-18, 0-19)を除外すると、非標準的なケースは、9ケースになる。そのうち、論理的な整合性・一貫性が確認できるケースは、3ケース(t-20, t-21, t-22)しかない。そのうち、一つ(t-20)は、A→B→Cの展開の後にさらにCについての予想を加えたもので、いわば標準的な展開の拡張型である。これも非標準型から外すと、非標準型は全部で8ケース

で、そのうち2ケース(t-21, t-22)しか論理的な整合性・一貫性を備えていない。

2-4-2. 非標準型で、非論理的なケースについて

非標準型で、非論理的な 6 ケースは、どのような点で標準的な展開から外れてしまい、そして論理的な整合性・一貫性を失ってしまうのか、確認しておく。

2-4-2-1. 事実の特定に失敗するケース

（ケース t-27）

3.11の地震で、やっと地球の異常に気づいた人もいるだろう。

これを機に、より多くの人々が環境について真剣に考えるべきだと思った。

今では太陽光発電は、それなりに普及しているように見えるがその一方で原子発電にどれだけ頼っていたかもよくわかった。

環境汚染も増える一方なので、リサイクルやエコについてもっと呼びかける必要があると感じる。

地震の影響で、被害は莫大なものではあったが、得たものもあったのではないかと思う。

論旨としては、3.11の地震によって、地球の環境汚染が、より際立って理解できるようになった、となる。標準的には、3.11の地震に言及する場合、それによる被害を話題にするものだが、このケースでは、中心的な話題を3.11の地震とは独立に生じていた環境汚染においている。とすれば、環境汚染の内実(その具体的な事実)について言及すべきところを、一切言及していないために、3.11の地震によって、従来から問題とされていた環境汚染の何が露わになったのか、わからない。わからないまま、「真剣に考えるべきだ」「呼びかける必要がある」といきなり理念や行動的な指針で結んでしまう。「Ａ事実→Ｂ対立する事実・解釈」の部分がないために、何を真剣に考え、何を解決するために呼び掛ける必要があるのか、わからないままになってしまう。次のように分解して考えてみよう。特定の現実を指示しているか、それと関連して話題となるだけの価値を帯びた単語だけを取り出してみる。

3.11の地震／地球の異常／太陽光発電／原子(力)発電／環境汚染／リサイクル／エコ／地震の影響

意味連関の強さによって整理してみると、大きく二つの系がある。

ａ：3.11の地震－地震の影響－原子力発電－環境汚染(放射能の意味で)－太陽光発電－エコ

ｂ：地球の異常－環境汚染－エコ－リサイクル－太陽光発電

ａの系の言葉を論理的に結び付けていくと、一例としては、次のようになる。

3.11の地震による原子力発電所は破壊され放射能による被害(環境汚染)が深刻である。これからは、太陽光発電等のよりエコロジカルな発電方法が推進されるべきだ。

ｂの系の一例としては、次のようになる。

人為的な産業活動による環境汚染は、地球の自然状態を異常な事態に追いやっている。それらを食い止めるには、資源のリサイクルや太陽光発電等のクリーンなエネルギー産出方法を検討すべきだ。

本来、違う系にある論理を、同時に(というよりも連想的にないまぜにして)扱おうとするところに一貫性の無い論理になってしまっている。

例えば次の場合を見てみよう。

（ケース t-28）
現代の生活は少し電気などといったエネルギーに依存しすぎていると思う。
だから、自分ができる方法で、節電や節水をするようにするのがいいと思う。
無理に“やらなきゃ”と思うのではなくて、“今あるエネルギーを大切にしよう”という優しい気持ちでエネルギーのことを思ってあげればいいと思う。
電気や石油は永久にあるわけではないから、今まわりを見回してみて、無駄だなと思ったものからはぶいていくのがいいのではないかと思う。(t-28)

一行目で、「電気などといったエネルギーに依存しすぎている」と言っておきながら、それに対して提案されるのは、(節電はともかく)節水の勧めである。「エネルギーに依存しすぎている」という事実に対して、それを批判できるような事実または解釈を述べていれば、問題を特定することができ「節水」ではなく、何をすべきか間違わなかっただろう。「Ａ事実→Ｂ対立する事実・解釈」の組み合わせが崩れているために、(初歩的なところでさえ)かみ合わない行動指針が提示されてしまう。同じパタンで、批判すべき事実を特定できていないために(なぜ依存しすぎるのが問題なのか特定できていないために)、「無理に"やらなきゃ"と思うのではなくて、“今あるエネルギーを大切にしよう”という優しい気持ちでエネルギーのことを思ってあげればいい」と提案される。が、その程度で解決がつく問題なのか、判断できない。より広い視野で見たときには、最初の文の「電気などといったエネルギーに依存しすぎている」ことが問題なのは、一つには最後の文にあるように(電気はともかく)「石油が永久にあるわけではない」ため、つまりこのままでは石油が枯渇して十分なエネルギーの産出を維持できないためであろう。ここに「Ａ事実→Ｂ対立する事実・解釈」の組み合わせがあるのだが、組み合わせてとして意識されていないので、ＡとＢは遠くに置かれ、「今後のあり方」を論理的に合理的に導きだす事実に基づいた根拠としての輪郭を作れないでいる。

2-4-2-2. 二つの話題に分割されるケース

また次のケースを見てみる。

（ケース t-26）
東日本大震災が起こるまで原発について深く考えたことはなかったが、ニュースや新聞な

ど見て恐しいものだと感じ、そのエネルギーを使っているにもかかわらず、何も関心を持たない自分に対しても恐しいと思った。
また、被災地の人々の復興に対する思いはものすごいエネルギーを持っていると思った。あきらめない気持ちや家族を失ったり、仕事をなくしてしまっても頑張ろうという強い精神力は、私たちが勇気をもらったのではないかと思う。
被災地の人々にも負けないエネルギーをもって日本をみんなでよくしていきたいと思った。

課題文にある「現代的な生活」が、「恐ろしい原発のエネルギーを使っている(にも関わらず無関心である)」ことで、また課題文にある「エネルギーの今後のあり方」が、「被災地の人々にも負けないエネルギーをもって日本をよくしていきたい」ということにあたる。そういう意味では、課題の内容を満たしているのだが、「現代的な生活」と「エネルギーの今後のあり方」とが、論理的には結び付かない稀なケースにあたる。ただし、両者は、東日本大震災に関連することとして、連想的には結び付いている。
これとまったく同じ構成をもったケースが、次のものである。

(ケース t-25)
私達が生きて、知っている限りでは世界中にたくさんの貧しい暮らしをしている人がいる中で日本人のように1日中電気を使い、長く仕事をし、またぜいたくに暮らしている人もいます。
みんなが同じ水準で生活できていないのが現代的な生活だと思います。
ＴＶや学校などで学ぶと、戦前やその後の日本は、あるものを上手に使い、食べ、知恵をだし生活してきたことが分かり、今日の生活がどれだけ裕福で幸せなことか思い知らされます。
エネルギーでは、危ないとわかっていた原子力を使わず、ちがうものででんきを補ったり、もっと全国的にせつでんしたらいいと思います。
新しいでんきのはつめいより、使わないようにしたいです。

課題文の「現代的な生活」が、前半の「世界には貧富の差があり、日本は裕福である」にあたり、課題文の「エネルギーの今後のあり方」が、「危ない原子力を使わずに節電していくべきだ」となる。この前半と後半の論理的な切断は、先の(t-26)のケースと同じである。そして、論理的には切断されながら、(電気)エネルギーをたくさん使うことに関しては、連想で結ばれている。先の(t-26)のケースに比べると、この(t-25)のケースは、自覚的に切断しているように見えるが(後半で「エネルギーでは」とはじめている)、要は意識的であれ無意識的であれ、一つの文章のなかに二つの論理的な結びつきを持たない話題が入りこむことを許容する感覚があることである。本論での分析の枠を超えることを承知で、次のことを指摘しておく。この二名には、物語の創作課題(「男の子」と「絵」と「海」を素材とする物語創作課題)においても共通点がある[iii]。一つは、物語を不幸なままで終わらせていることである(不幸なままの物語は、28ケース中８ケース)。それも以前は安定した幸せな状態だったものが、不安定で不幸な状態になるという展開である。さらに、物語の標準的な展開は、ある人物の行動が連続的に描かれるものだが、この二名のケースは、時間的に隔たった２点を対

照的に描く物語になっている(「母親が生きていた頃／亡くなってからのこと」、「主人公が若い頃／息子を持つ歳になった頃」)。こうした物語の構成と、本論の主題である説明文に表れた特異な構成とは、関連性があるように思える。

2-4-2-3. 過剰な反復によるケース

非標準型の展開で論理的な整合性を欠いたケースの残り二つは、「A：事実→B：対立する事実または解釈→C：行動指針」の輪郭が、その構成要素の過剰な反復によって曖昧になっている点で共通している。この 2 ケースは、先にA→B→Cの標準型と似通っていながら除外した 3 ケースのうちの 2 ケースだが、あらためてその展開の特徴を指摘してみる。

ケース t-23　A：事実→B1：Aに対立する事実(解釈)→[C1：B1への行動指針→C2：C1に対立する行動指針]→B2：C2に対立する解釈→C3：B1への行動指針(＝C1＋C2)→C4：B2への行動指針

ケース t-24　A1：事実→B1：対立する解釈→A2：事実→B2：対立する解釈→[C1：行動指針→C2：行動指針](t-24)

ケース t-23の本文は、次である。

t-23(オリジナル)

A：	現代的な生活をするためにはエネルギーが必要だが、
B1(－A)：	永久に今のような生活をするにはエネルギーが足りない。
C1：	うまくエネルギーを作る方法があればいいのだが、
C2(－C1)：	作る方法ができるより、エネルギーを消費する量を減らせばいいと思うが、
B2(－C2)：	もう楽な生活に慣れてしまってからでは遅い。
C3(－B1／＝C1＋C2)：	これからはエネルギーの効率的な使い方と、安価で誰でも使えるエネルギー製造機械のかいはつが大事だと私は思う。
C4(－B2)：	あと「エコ」といって電力などをおさえるのではなく、ちゃんと「あと何年で・・・。」とか具体的な数字をだして、私達の尻をたたく存在が必要だと思う。

このケースは、この表現のままでは、論理的な一貫性や整合性を欠いているが、いわゆる説明文に要求される論理-科学的な思考様式[iv]に反して実践的な思考様式の特徴がよく表現されている。同じテーマを違う文脈で二度使ってみたり、それも一度否定したはずのことを後で肯定してみたり、と言った反復と曖昧さを含んでいる。このケースを次のように言い換えた時に違和感はあるだろうか。

t-23(修正版)

A：現代的な生活をするためにはエネルギーが必要だが、

B(-A)：永久に今のような生活をするにはエネルギーが足りない。

B：うまくエネルギーを作る方法があればいいのだが、*可能だろうか。*
B：作る方法ができるより、エネルギーを消費する量を減らせばいいとも思うが、
B：もう楽な生活に慣れてしまってからでは遅い*のだろうか。*
C：*いまのところ、*これからはエネルギーの効率的な使い方と、安価で誰でも使えるエネルギー製造機械のかいはつが大事だと私は思う。
Cあと「エコ」といって[スローガンだけで]電力などをおさえるのではなく、ちゃんと「あと何年で・・・。」とか具体的な数字をだして、[楽な生活に慣れた]私たちには私達の尻をたたく存在も必要だと思う。

下線を引いた個所が、訂正したり加えたりした部分である。諸々の事実が備えている強固な因果律や論理的な関係性やそれらに基づいた客観的な可能性に対して、ある程度の(つまり常識的な)範囲で妥当なことを書くべきだとわかっていても、観念のなかでは矛盾していたり、不確実なままに保留したりすることができる。特に時間的な推移のなかで、先に否定しておいたことを、いまは肯定してしまうような表現は、実際的にはありうるし、直接的な利害が絡まなければなおさらのことである。そのような点で、先のケースのオリジナルは、観念的によくわからないことを、論理-科学的な思考様式に流し込もうとした時に、そこで可能な限り否定されるべき観念的であること、または観念的に処理していることを明示しなかった、または明示できなかったために生じた歪みであろう。一方で、書き換えたケース t-23(修正版)は、観念的であることを観念的であると限定し明示しただけで、矛盾や不確実性を主観的な観念が含みうること自体も客観視する論理的な表現として違和感なく成り立ってしまう。逆に言うと、このケースのオリジナルは、論理-科学的な思考様式が優位とされる表現の中に、実践的な思考様式を和解させることに失敗している。論理-科学的な思考様式と実践的な思考様式の和解に失敗している例としては、残りのもう一つのケースについても言えるのだが、先のケースが、論理-科学的な思考様式に無理に合わせようとしたのに反して、次のケースでは、論理-科学的な思考様式の形式を使いながら、内実はその思考様式を拒否することで論理的な整合性を崩してしまう。

A1：東北の震災があってからエコや節電をより多く呼びかけるようになったが、
B1：何かあってからこれをするというやり方はおかしいと思う。
A2：東京などの大都市は、イルミネーションが多すぎていたのに
B2：こういう事態になるまで何もしなかった。
C1：ａ普段から節電・節水をしている人もいるのだから、ｂ少しでも作られるエネルギーを無駄にしないようになっていけばいいと思う。
C2：ａ原子力発電は、原発が怖いし、ｂそれに変わるエネルギーを作り出せる発電の仕方が見つかればいいと思う。

行動指針に先だって、事実を示してその事実を否定する事実(または解釈)を提示するのが、標準的な形式であり、「A：事実→B：対立する事実または解釈」と表示してきた。上もA1からB1、そしてA2からB2も、基本的には、この標準的な形式にそっている。が、B1やB2は、論理的な批判にはなっておらず、倫理的な非難になっている。論理的な表現様式の標

準型の体裁を取りながら、実践的な思考様式が接続されている。実践的な思考様式は、中立的な立場から静観するのではなく、またはそれに先だって善いことや悪いこととして物事を認知する。それがなぜ善いことなのか、なぜ悪いことなのか、常識や良識がそう言うのだから、善であり、悪となる。それ以上遡行する暇はないのである。つまりこのケースにおいては、節電等によるエコロジカルな生活は、無条件に良いことであり、すべきことになっているために、震災による電力不足をきっかけとしたエコ生活など本質的ではない、と批判されている。A1：「東北の震災があってからエコや節電をより多く呼びかけるようになったが」本来は、常に省エネ、節電等のエコロジカルな生活をすべきで、B1「何かあってからこれをするというやり方はおかしいと思う」ということであろう。主題は、震災の影響に対する現実的な対処方法を検討するのではなく、スローガン化された環境保護である。だから、A2：「東京などの大都市は、イルミネーションが多すぎていたのに」B2：(節電を余儀なくされるような)「こういう事態になるまで何もしなかった」と非難が続くことになる。イルミネーションが、何のためであったのか、まったく考慮してもらえない。要するに「A：事実→B'：対立する倫理的な判断」という形式は、事実と向き合う素振りだけで、事実が備えている論理的な拘束力から何かを導きだしたり批判したりはしていない。

このことを踏まえてから、「今後のあり方」として行動指針が語られるC1とC2の一見矛盾する結論部分が両立してしまうのも理解できる。先にC1で「少しでも作られるエネルギーを無駄にしないようになっていけばいい」と言った後に、これまで話題にもしなかった原発について言及し、C2：「原子力発電は、原発が怖いし、それに変わるエネルギーを作り出せる発電の仕方が見つかればいいと思う」と締めくくる。節電等のエコ生活を推奨しておいて、最後に原発に代わるエネルギー生産を望むという矛盾が成り立つのは、そもそも(A1～B2においても)現実的な事実から導きだした論理がどこにもないからであり、時間を埋めるような感覚で、同じことだが文字数をかせぐだけの感覚で、ゆるい連想から生まれた言葉を繋げることができるのである。にもかかわらず、再確認しておかなくてはいけないのは、擬似的に「A：事実→B：対立する事実(解釈)→C：行動指針」といった標準的な展開を、ゆるやかに作ることで、あたかも論理的に語っているような印象を作りだしている。論理的な表現様式に、現実的な事実の拘束力と拮抗しうるだけの知識や論理的な思考を持っていないために、良識的で実践的な思考と言葉が接続されているのである。

---

[i] 小野田貴夫「物語の構成と素材の扱い方に関する試論」常葉国文, 2012.

[ii] 同じ属性の別集団(18～21歳・女子短大生21名)を対象に、次の二つの指示からなる課題を一週間の間隔をおいて実施(2012年9月実施)した。課題内容は、次の二つ。「絵本についてあなたの考えを書いてください。」と「メールについてあなたの考えを書いてください」

[iii] t-25、t-26を書いた2名が書いた物語は次のものである。

t-25を書いた者の物語「以前まで海が好きだった少年はその海をもう好きではなくなった。3月11日、東北に大地震が起こりその時に発生した津波で大好きなお母さんをうばわれたからだ。少年はお母さんと海へ行くのが好きだった。お母さんが海が好きだったから自然と少年も好きになっていった。少年はよく海の中に入って笑うお母さんの絵を描いていた。

その絵を何枚も何枚も描いていた。今はその絵を見るのがつらい。大好きな海にお母さんを奪われてしまったから。」

t-26を書いた者の物語「僕が小さい頃遊んでいた海は、今はもうない。昔は父さんたち漁師がたくさんの舟で海へ出て、帰ってくる度に笑顔であふれ、すきとおったブルーの水がキラキラとまぶしかった。大人になり、むすこができた。むすこが学校から帰ってくると、今日かいた絵を見せてきた。「私のまち」というテーマでかいたものだ。その絵をみて、涙がでてきた。ぼくと、むすこが、どす黒い色をした海をみて、泣いている絵だった。」

[iv] J.S.ブルーナー『可能世界の心理』みすず書房, 1998.

本文一覧

Num	本文	論理的な整合性	A:事実 ↓ B:対立する事実（解釈） ↓ C:行動指針	文字数
t-1	現在の生活に電気は欠かせない。 電車やパソコン、照明など、挙げたらきりがない。 その電気を発電する中で3割を占めているのが原子力発電である。 今回の震災で原子力発電の危険性が浮き彫りになった。 それを受け、デモを行う人たちもいる。 作った事に対して怒りをぶつける人もいる。 しかし、原子力発電の恩恵を受けているのは私たちである。 それによって生活が豊かになったにも関わらず、危険だと知るや否や、今までのことを忘れ憤る。 私はこの行動に違和感を覚えた。 原子力発電の危険性を知った我々なら、今後の対応について考えていけるだろう。 今はただ怒るよりも、新たなエネルギーを見つけ、それに変えていけるように、前を向くべきである。 自分たちでもできる太陽光発電の設置や節電をすすめるべきだ。	○	○	329
t-2	今、原子力発電に対し、賛成派と反対派に分かれている。 反対派はデモを起こし、そのデモは大人から子どもの大多数が参加している。 私は原子力発電に対し、賛成である。 今、私達の生活があるのは原発の御蔭だからである。 反対派は原発を「今すぐにでも無くせ」と訴えているが、無くしたところで、原発で作っていた電気や物はどうやって作り出すのか、また、原発によって出来た市のお金は、これから何で作るのか、疑問である。 原発が爆発すると放射線等大変な事態になるが、それは想定外ではなく、福島の事故をふまえて、より強固なものにすれば良いと思う。 私達が今までの生活を送れているのは、原発があるからだと思っている。	○	○	291
t-3	エネルギーについて私が考えたのは食から得られるエネルギーについてです。 昔は朝ごはんをしっかり食べてから学校、会社に行く人が多かったと聞きます。 しかし現代では朝ごはんを食べいる人は少なくなっているという現状があります。 朝ごはんを食べる食べないでは、その日の自分体力、気持ちに大きく関わってくるのです。 エネルギーを作るもの（素材）がなければエネルギーは作れません。 朝ごはんだけではなく昼も夜もエネルギーに関わってきます。 今後私たちはもっとエネルギーを使うためにも食生活を見直すべきです。 「エネルギー」は今後、人々の中で今よりさらに大切になる存在であるべきなのです。	○	○	280
t-4	エネルギーに限りがあることはわかっていても、使用量をセーブできないほど、私たちはエネルギーに依存している。 自動車に乗ること、冷房にあたること、エレベーターを使うことエネルギーを大量に使うこれらはもはやなくてはならない。 しかしエネルギーを生み出すには“環境汚染”という大きなリスクがある。 その為に今世間では太陽光発電や風力発電の大切さが主張されているが、いまいち私たちの日常生活の中には入ってこない。 まだどこか他人事のような気でいるのだと思う。 エネルギーが底をついたときにはもう遅い。 そろそろ目を覚まさなければいけない。	○	○	259
t-5	今現在の社会では「電力」というものは外せないものだと思う。 IT化がすすみ、PC，ケータイ等、電力が必要なものが多くなってきた。 しかし問題はその、エネルギーをどう確保していくかだ。 3、11日の大震災以来、原発には安全面から批評が集まっている。 イギリスではすでに、原発を廃止する法が可決されそうだ。 しかし、原発でつくられるエネルギーは相当なものだった。 それを補う新たなエネルギーを見つけないかぎり、脱原発は難しいだろう。 新たなエネルギー資源の確保、省電力の電化製品の開発などが、今後の日本に必要なのではないだろうか。	○	○	256
t-6	現代の生活には電力が不可欠ということは、誰でも理解できることだが、問題はその電力を生み出すエネルギーを何にするかである。 東日本大震災の福島第一原子力発電所の事故は、人類に原子力がいかに危険かを改めて認識させた事故だった。 「クリーンエネルギー」などという言葉につられて作った原発はこれからもう作られることがなくなるだろう。 今後、人類は太陽光発電などの自然エネルギーに切り換えると共に、生活に使う電力の量を見直さなければならない。 これは、人ごとではなく、一人一人が考えるべきことである。	○	○	241
t-7	現在、日本では原発が問題になっている。 3月11日に発生した東日本大震災。 これにより、福島の原発が爆発し、チェルノブイリ以来、最悪の原発事故が発生してしまった。 放射線など、たくさんの問題が山積するにもかかわらず、政府は具体的な案を出さず、日々時間が過ぎていっている。 そんな中、先日、東京で脱・原発と銘打った大規模なデモが起こり参加者は4万人を超えた。 あのような悲劇を再びくりかえさないために、我々日本、いや、世界が原発から離れるべきだと思う。	○	○	220
t-8	今、私たちの生活に電気は欠かせないものになっている。 家は家電製品であふれ、オール電化住宅などもでてきている。 私たちは電気が無ければ生活できないのではないかと思う。 現在その電気について様々な問題が発生している。 一番大きな問題が「原子力発電」についての問題ではないだろうか。 私たちは電気が無ければ生活できない。 それはこれからもずっと続いていくと思う。 だから今まで目をそらしたり考えてこなかった問題に正面から向き合わなければならないと思う。	○	○	217

本文一覧

Num	本文	論理的な整合性	A:事実 ↓ B:対立する事実（解釈） ↓ C:行動指針	文字数
t-9	現代の豊かで便利な生活は、エネルギーの量と比例しない。 日本ではエネルギー資源が少なく、輸入に頼っていたところに、原発の問題で“原子力”に対する反発が強くなり、ますますエネルギーが足りなくなってきている。 今後、エネルギーは満足に得られるのか。 上記の通り、それは難しい。 しかし私達は「便利」な生活を捨てることもできないだろう。 両立するには、新エネルギーの開発が求められる。	○	○	184
t-10	今の生活があるのは、原発のおかげといってもいいように思えます。 しかし、福島であった惨事を考えると、このままではいけないと思います。 リスクが低く、効率のよい発電や、エネルギーの元となるものを普及することに努めていくべきです。 ソーラーや風力発電は、原発、火力よりはリスクも低いように思えるので、このことを中心にして今後の日本や世界を成り立たせていくことが大事だと思います。	○	○	184
t-11	車だけでなく、バイクも電気で走る時代、私たちの生活は、電気なしでは、どうにもならない。 しかし、震災後の日本では、どうにも電気は足りていない。 どのようにして、電気をつくるか。 原子力には難しい問題が多く、なかなか前向きになれない。 それならば、自分の家で必要な電気は、自分でつくれば良い。 その為には太陽光発電という(中断)	○	○	158
t-12	便利な現代的生活をしたいというのはだれもが思っていることだと思うけど、原発のえいきょうで電気があまり使えない今は、エネルギーの使用をひかえ、節約的な生活をしていくべきだと思う。 エアコンや暖ぼうの使用をひかえ、せんぷうきやストーブを使ったりと、ひとむかし前のエネルギーをあまり使わない生活がいいと思いました。	○	○	154
t-13	節電が以前に比べ強くいわれている現在であるが技術の進歩により、電気の消費（を抑えること）はより困難である。 さらに電気は蓄えておくことが出来ず、その時発電されたものを使うため、個人個人が常に節電を意識しなくてはならない。 安定した電気エネルギー生活を過ごすためには蓄電できる装置を発明してほしいと思う。	○	○	149
t-14	現代は、様々なものが普及し、電子機器（携帯電話、ゲーム、テレビ、エアコン等）が今一番話題になっていると思います。 今では、携帯電話は“話す”“打つ”だけではなく、スマートフォンやアイフォーンと言った指で操作し、拡大したり縮小したり、『アプリ』といったシステム（？）によって、音楽から料理、占い等、日常生活では欠かせないものとなってきている。 この一つさえあれば、勉強にも会社でも使えるもので、一種の“ブーム”になっている。 “持っていて当たり前”ではないと思うが、私も少しは興味があるので一度使ってみたいとは思っている。 こうしたものの発展で、エネルギーの消費量は一段と増えてきている。 環境問題や地球温暖化にも影響しているので、気を付けなければならないと思います。	△	○	330
t-15	現代的な生活、つまり便利な生活にあって、“食物エネルギー”である食事の見直しをはかりたい。 以前、市役所の食堂で食事をしていた際、味が濃過ぎるのではないか、と感じた。 市役所職員はほぼ事務職で、工事現場の作業員のような「しょっぱい」食事では摂取エネルギー超過である。 年々高血圧、肥満、コレステロールの摂り過ぎ等、生活習慣による病気が増加している。 人間は食物からエネルギーを摂取するが、生命維持に必要な量以上は控えることが大事である。	△	○	214
t-16	私たちが生活していられるのはエネルギーがあってこそだが、東日本大震災が起きてからは、そのエネルギーのあり方を見直す機会ができたと思う。 エコやリサイクルが可能なわけであって、何も環境に優しくないように思える。 地震があって節電などをしているが、これからも、そういった心がけをすべきだと思う。 便利な生活から抜けだせない私たちには、エネルギーが必要だから。	△	○	174
t-17	日本は比較的裕福なため、日々にかかわるエネルギーの大切さにあまり気づいていないだろうと考える。 3月11日の震災から早半年。 “節約”の文字が大体的にとりあげられるようになったのもこのころからである。 しかし、みんながみんな節約を心がけているのだろうか。 以前から心がけている人にとっては変わらない生活。 心がけるようになった人は節約術等の本を購入して、別の出費が増えたのではないだろうか。 無理に心がけ、熱中症になってしまった人もいるのではないだろうか。 節約も大事だが、人の生命はもっと大事だ。 適度な節約が必要であって無理することはない。 エネルギー資源は限られているが、苦しい生活をすることはないと考える。	×	○	300
t-18	現代は、TV、PC、ランプなど、電気のエネルギーの消費が激しい。 人間は、それにたよってしまい、運動を怠ってしまうし、いろいろな食べ物が手に入るようになったから、体のエネルギーは、十分に消費できず、そのせいなのか、肥満が満えている。 それが気になった人間は、TVの通販を見て、外にも出ずに、ランニングマシンなどを買う。 それを運送するのは、もちろんトラックや飛行機など、機械である。 その機械はガソリンというエネルギーを使う。 ガソリンの元は石油だとどこかできいたことがある。 人間は、自分で石油というエネルギー源を使い、使ったことを悩む。	×	×	264

本文一覧

Num	本文	論理的な整合性	A:事実 ↓ B:対立する事実(解釈) ↓ C:行動指針	文字数
t-19	現代的な生活とは、アナログでない生活のことを言うのだと思う。 例えば書籍の電子化は現代的だと思う。 ただ、現代的な生活には電気がどうしても必要になってくる。 原発問題が騒がれているが、電気が必要だからこそ問題になっている。 自然エネルギーの推進(中断)	中断	×	122
t-20	現代の私たちの生活にかかせないエネルギーは、たくさんある。 原子力発電もその一つだった。 しかし、今年3月11日に起こった東日本大震災を受けて、日本だけでなく世界の考え方が変わったように感じた。 もちろん、私も他人事ではないと思っている。 浜岡原子力発電所があるからだ。 太陽光や風力などの自然エネルギーを主体としてほしいと考えている。 そう考えている人は多いだろう。 しかし、時が経ちこの脱原発の動きが風化してしまったら？ 私たちは、また同じ過ちを犯す。 故郷が奪われてしまうかもしれない。 これからなんて･･･結局まだ誰にも分からないのだ。	○	△(○⇒+)	262
t-21	半年前の東日本大震災により、原子力発電の安全性が問われることとなった。 国民の多くが原子力発電に反対し、先日も約6万人が集まる反対イベントが行われた。 今、この今、日本という国は、脱原発をしかけていかなければならない。 福島では人が住めない場所がうまれ、放射線を含んだ食べものと、風評被害が人々を苦しめている。 日本はこの夏、節電運動によって、停電することなくのりきることができた。 原発による発電がなくとも、新しく、風力や太陽光などでエネルギーをつくり、クリーンな日本の未来をきづいていくべきだと思う	○	×	246
t-22	現在、原子力発電が何かと問題になっている。 今年3月にあった大震災で、発電機が爆発した。 放射能が放出し、震災から半年たった今でも、放射能からのがれるために避難している人もいる。 原発は、今の私たちのくらしを支えるために重要なものであった。 しかし、今は、怖い危ないという印象の方が強い。 豊かで便利な生活をする裏側には大きなリスクがあるのだろうか。	○	×	170
t-23	現代的な生活をするためにはエネルギーが必要だが、永久に今のような生活をするにはエネルギーが足りない。 うまくエネルギーを作る方法があればいいのだが、作る方法ができるより、エネルギーを消費する量を減らせばいいと思うが、もう楽な生活に慣れてしまってからでは遅い。 これからはエネルギーの効率的な使い方と、安価で誰でも使えるエネルギー製造機械のかいはつが大事だと私は思う。 あと「エコ」といって電力などをおさえるのではなく、ちゃんと「あと何年で･･･。」とか具体的な数字をだして、私達の尻をたたく存在が必要だと思う。	△	△	252
t-24	東北の震災があってからエコや節電をより多く呼びかけるようになったが、何かあってからこれをするというやり方はおかしいと思う。 東京などの大都市は、イルミネーションが多すぎていたのにこういう事態になるまで何もしなかった。 普段から節電・節水をしている人もいるのだから、少しでも作られるエネルギーを無駄にしないようになっていけばいいと思う。 原子力発電は、原発が怖いし、それに変わるエネルギーを作り出せる発電の仕方が見つかればいいと思う。	△	△	214
t-25	私達が生きて、知っている限りでは世界中にたくさんの貧しい暮らしをしている人がいる中で日本人のように1日中電気を使い、長く仕事をし、またぜいたくに暮らしている人もいます。 みんなが同じ水準で生活できていないのが現代的な生活だと思います。 TVや学校などで学ぶと、戦前やその後の日本は、あるものを上手に使い、食べ、知恵をだし生活してきたことが分かり、今日の生活がどれだけ裕福で幸せなことか思い知らされます。 エネルギーでは、危ないとわかっていた原子力を使わず、ちがうものでやんきを補ったり、もっと全国的にせつでんしたらいいと思います。 新しいでんきのはつめいより、使わないようにしたいです。	×	×	309
t-26	東日本大震災が起こるまで原発について深く考えたことはなかったが、ニュースや新聞など見て恐しいものだと感じ、そのエネルギーを使っているにもかかわらず、何も関心を持たない自分に対しても恐しいと思った。 また、被災地の人々の復興に対する思いはものすごいエネルギーを持っていると思った。 あきらめない気持ちや家族を失ったり、仕事をなくしてしまっても頑張ろうという強い精神力は、私たちが勇気をもらったのではないかと思う。 被災地の人々にも負けないエネルギーをもって日本をみんなでよくしていきたいと思った。	×	×	257
t-27	3．11の地震で、やっと地球の異常に気づいた人もいるだろう。 これを機に、より多くの人々が環境について真剣に考えるべきだと思った。 今では太陽光発電は、それなりに普及しているように見えるがその一方で原子発電にどれだけ頼ったいたかもよくわかった。 環境汚染も増える一方なので、リサイクルやエコについてもっと呼びかける必要があると感じる。 地震の影響で、被害は莫大なものではあったが、得たものもあったのではないかと思う。	×	×	204
t-28	現代の生活は少し電気などといったエネルギーに依存しすぎていると思う。 だから、自分ができる方法で、節電や節水をするようにするのがいいと思う。 無理に“やらなきゃ”と思うのではなくて、“今あるエネルギーを大切にしよう”という優しい気持ちでエネルギーのことを思ってあげればいいと思う。 電気や石油は永久にあるわけではないから、今まわりを見回してみて、無駄だなと思ったものからはぶいていくのがいいのではないかと思う。	×	×	202